

2012年「オーディオ・ホームシアター展」協会セミナーより

## ホームシアターセミナー(映像)報告

デジタルホームシアター普及委員会 映像環境WG 主査  
鴻池 賢三

### 1. セミナーの方向性と期待する効果

デジタルホームシアター普及委員会「映像環境WG」では、ホームシアターユーザーが、制作者の意図に忠実(=高画質)且つ長時間でも快適な視聴が行え、ひいてはホームシアターの魅力アップと普及に繋がるよう、ガイドラインの策定に向けた活動および、JDPC 講座を通じて映像調整技術者の育成に取り組んでいる。

今回のセミナーでは、映像調整のベースとなる「キャリブレーション」の認知度を高めるべく、高画質の定義や調整の必要性など基礎的な情報を発信し、アーリーアダプターへの啓蒙を第一の目標とした。

直近では、アーリーアダプター(マニア)から一般ユーザーへの情報伝搬と、その中から JDPC 講座などを通じた学習を希望するステップアップユーザーの出現を促し、将来的には幅広いエンドユーザーに「良い映像」に対する共通認識の定着と欲求の喚起する事で、映像文化のレベルアップに繋がるものと期待している。

### 2. 講演の内容

講演では、以下の項目について解説および実演を行った。

高画質とは?      キャリブレーション(校正)とは?      キャリブレーションの中身

好みに合った画作り(映像調整)      キャリブレーション機材紹介      デモンストレーション

以下、参考までに、各項目の内容を端的に紹介したい:

高画質とは?

キャリブレーション 基礎講座 3

高画質とは?

Q: どちらが高画質?

A      B



まず会場では、クイズを出題した。聴講者には予備知識を一切与えずに、スライドを表示し、写真「A」と「B」のどちらが高画質と思うか挙手を募った。

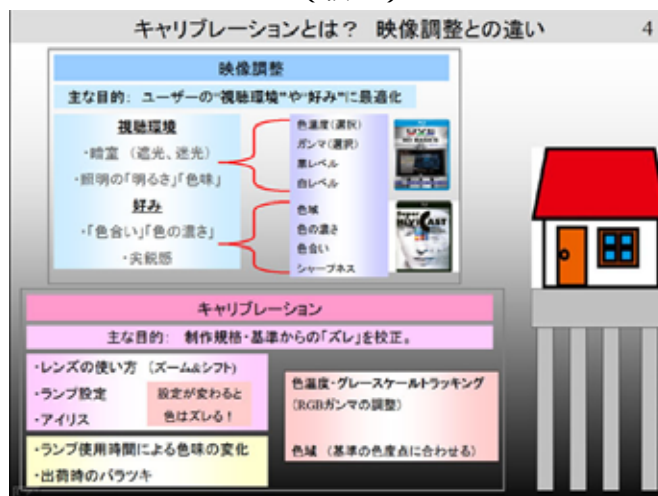
過半数は色の濃い「B」と答えたが、実は引っ掛け問題で、正解は「どちらが高画質かは分からない」である。出題は、聴講者に当事者意識を持たせる意図もあるが、ポイントとして、高画質とは各視聴者が自身の

好みを含めた感覚で決めるべきではなく、「制作者の意図に忠実かどうか」が判断基準である事を伝えるのが狙いである。制作者が見ているであろう映像をエンドユーザーが体験する機会は実質無いので、制作基準に沿った科学的な調整が合理的且つ有効な手段である事を、聴講者にも納得頂けたと思う。

[ポイント]

- ・「高画質」の定義は曖昧である。世界的には「制作者の意図に忠実=高画質」とされている。
- ・制作者の意図を忠実に再現するには、制作基準に沿った科学的な調整が必要。

キャリブレーション(校正)とは？



日本のユーザー間では、映像機器の「キャリブレーション(校正)」と、色合いや色の濃さなど「視聴者の好みを反映する映像調整」の両者を混同し、「どちらが良いか？」という議論に陥りがちである。そこで今回は、スライドの通りそれぞれの役割を整理して、「キャリブレーション」の必要性および「好みの映像調整」と矛盾しない事を訴える事にした。また、家に例えると、キャリブレーションは土台、好みの映像調整は建物に該当するという説明で、聴講者の理解が大いに進んだ手応えを得た。

[ポイント]

- ・キャリブレーション > 土台。平らであるべきで、好みが入る余地は無い。
- ・好みの映像調整 > 建物。洋風でも和風でも、屋根が赤でも青でも好みで構わない。
- ・キャリブレーションが出来ていてこそ、好みの映像調整も映える。

キャリブレーションの中身

聴講者がキャリブレーションについて更に理解が深められるよう、キャリブレーションの対象となる調整項目を示した。特に映像の背骨とも言えるグレースケール(黒 グレー 白の無彩色に色付きが無いのが理想)については、実際にありがちな「調整不備の例」と「正しい例」を実写映像で示し、見え方の違いを解説した。この実写映像は、ここ数年来、各所での講座を通じて改良を重ねて来たものであり、キャリブレーションの必要性を訴えられたと思う。

[ポイント]

- ・キャリブレーションの対象は主に、「グレースケール」と「カラーマネジメント(色域)」
- ・「グレースケール」は、白黒映像だけでなく、カラー映像の色調や立体感にも影響する。

### 好みに合った画作り（映像調整）

キャリブレーションとの違いを明確にする目的で、好みの映像調整にも触れた。テレビやプロジェクターメーカーが持つ映像モード（プリセット）と映像調整度合いの関係、例えば、シネマモードはHDTVの制作基準である、色温度 6500K、ガンマ 2.2 に沿っている事が多いなど、傾向を列挙した。

### キャリブレーション機材紹介

今回紹介したキャリブレーションを実践するために、どのような機材が必要かを解説した。因みに機材は精度や自動化の度合いによっていくつかのパターンが考えられ、重視する機能や性能と予算で選択する事ができる。最も安価な組み合わせでは測光センサーとPCソフトウェアの組み合わせで3万円程度から、USのハイエンドインストレーターが使用する最高級のシステムの場合、測光センサーが約130万円、測定用パターンジェネレーターが40万円、PCソフトウェアが30万円、計200万円程度である。

セミナー修了後、聴講者から機材に関する熱心な質問が寄せられ、キャリブレーションに対する興味を喚起できたように感じた。

### デモンストレーション

キャリブレーションの必要性を聴講者が「体感」できる事を目的とした。今回は、プロジェクターの設置設定による「狂い」の例として、アパーチャー（レンズに内蔵の絞り）量を設定で一段ずつ変更し、色温度の変化をその場で測定して数値で示した。このデモンストレーションでは、少なく無い変化が数値から読み取れ、聴講者から驚きの声が上がった。一端の例ではあるものの、キャリブレーションの必要性について理解を得るには効果的であったと思う。

## 3. さいごに ～セミナーを終えて

聴講者の中途退席は少なく、最後に設けたQ&Aコーナーでも核心を突いた質問が相次ぎました。今回の目標であった、「アーリーアダプターへの啓蒙」という点では、一定の成果が得られたと考えます。また、セミナー終了後に一部の聴講者が集まり、さらに専門的な質疑を受けるなど、ごく少数ではあるものの、以前からキャリブレーションに興味を持ち、情報を得る機会を待っていたようにも見受けられました。今後も、地道ながら啓蒙活動の継続を起点に、映像文化のレベルアップやホームシアターの普及を目指し、鋭意尽力したいと思います。

さいごに、「オーディオ・ホームシアター展」の中で、貴重な場所と時間を託して頂いた協会、運営関係者、ご足労頂いた聴講者の皆様に感謝の意を表します。ありがとうございました。

### 筆者プロフィール



鴻池賢三（こうのいけ けんぞう）

オーディオ・ビジュアル評論家。米 Imaging Science Foundation の認定を受け、科学的な観点から、高画質の定義および映像キャリブレーションの啓蒙活動を行っている。